

25070C

クリのくん蒸処理から脱却するクリシギゾウムシ防除技術の開発

1 代表機関・研究総括者

(独) 農研機構果樹研究所・井原 史雄

2 研究期間：2013～2015 年度（3 年間）

3 研究目的

クリのクリシギゾウムシに対し、くん蒸処理を代替する温湯処理、氷蔵処理や立木防除技術などについて、多様な生産条件の生産者や地域の条件に合わせて容易に導入できる技術体系を確立する。

4 研究内容及び実施体制

① 栽培管理による防除技術の開発

栽培管理による防除について、発生生態の解明を通して、適期に効率的な防除が行えるよう体系化を行う。

((独) 農研機構果樹研究所、茨城県農業総合センター園芸研究所、岐阜県中山間農業研究所、山口県農林総合技術センター、愛媛県農林水産研究所果樹研究センター、熊本県農業研究センター果樹研究所)

② 収穫後処理による殺虫技術の確立

クリの収穫後処理技術について、氷蔵や温湯処理技術の処理方法や、行程の簡素化などを検討し、簡便な技術として確立する。

(京都府農林水産技術センター農林センター、(地独)大阪府立環境農林水産総合研究所、兵庫県立農林水産技術総合センター、鳥根県農業技術センター)

③ クリシギゾウムシ防除マニュアルの作成と技術の普及

得られた成果を基に産地の条件に合わせて導入しやすいマニュアルを作成する。普及支援組織により開発した技術の実証と普及を行う。

((独) 農研機構果樹研究所、岐阜県農政部農業経営課、熊本県上益城地域振興局農業普及・振興課、兵庫県立農林水産技術総合センター)

5 達成目標

臭化メチルくん蒸やヨウ化メチルに頼らない技術として、収穫後の温湯処理、氷蔵処理、及び立木防除技術を確立する。

6 期待される効果

クリは果樹の中でも収穫時期が秋季に限られ、季節を強く感じることのできる果物であり、開発した技術による、クリの安定供給は我が国の豊かな食生活の維持に貢献できる。

現
状

クリシギゾウムシの防除は、収穫後の臭化メチルくん蒸が主な対策

クリ用途の臭化メチルは、H25年末に全廃、継続使用が困難に

代替防除技術

・ヨウ化メチルによるくん蒸

- ・東日本大震災の影響で原材料供給に支障
- ・くん蒸施設整備に遅れ（安全に使用するには施設の改修が必要）

くん蒸処理に頼らない、防除体系の確立が急務

全国のクリ生産地
クリシギゾウムシ被害

早生品種

発生生態を解明し地域ごとの被害開始時期を解明

(独)農研機構果樹研究所

Yes

No

立木防除の
可能性

急傾斜地の産地
生産者の高齢化

収穫後処理
技術を確立

No

Yes

温湯処理、氷蔵処理について、処理後の作業も含めて簡便な技術として確立

京都府農林水産技術センター農林センター
(地独)大阪府立環境農林水産総合研究所
兵庫県立農林水産技術総合センター
島根県農業技術センター

立木防除技術を開発

生果流通

加工
用途

最小限の防除と低温保管で被害を抑制する技術を開発

岐阜県中山間農業研究所

立木防除技術の開発(発生生態に基づく適期防除、農薬登録拡大、発生予察のための生態解明)、IPM実践指標の策定

現地での実証・普及

岐阜県農政部農業経営課
熊本県上益城地域振興局農業普及・振興課
兵庫県立農林水産技術総合センター

(独)農研機構果樹研究所
茨城県農業総合センター園芸研究所
岐阜県中山間農業研究所
山口県農林総合技術センター
愛媛県農林水産研究所果樹研究センター
熊本県農業研究センター

様々な産地の状況に応じた
対策技術としてマニュアル化

全国のクリ産地を維持し
クリの安定供給に貢献